

ゴーヤって不思議だね

この事例は、「ゴーヤに興味をもった子どもが、日々観察することで、ゴーヤの様々な不思議と出会い、好奇心を膨らませ、さらに興味を深めていく姿を捉えた」実践です。

子どもたちが、日々目にすると思われる場に植栽を置くなどの環境の工夫をするとともに、子どものつぶやきを見逃さず、その子どもの感じ方、考え方に寄り添う保育者の適時な関わりが、子どもの感性の育ちを支え、新たな気づきや発見へと繋がっていることが分かります。

社会福祉法人信州福祉会 わかば保育園

4歳児

葉もゴーヤの匂いがする 5月

- 日除けを兼ねて、職員室前に、大型プランターを並べて、ゴーヤとアサガオを植えた。定植後しばらくすると、本葉の数も増え始め、「こっちは、アサガオでしょ。これは何なの?」と、聞いてくる子どもがいた。ゴーヤと知らせると…。
Aさん:「食べたことあるよ。苦いでしょう。どこに実ができるの?」
- 家庭での食事と繋げて考えて、これからの生長に興味と期待をもち始めた。
- Aさんは、葉に触って、「チクチクするね」、その手の匂いをかいで「ゴーヤの匂いがする。葉っぱなのにゴーヤって分かるね」



ビヨンビヨンがあるから落ちない 8月

- Kさんは、雄花と雌花の違いや実が付いている様子を友達や職員に知らせていた。ゴーヤの蔓がネットに巻き付いて伸びていることに気づき、「クルクルでビヨンビヨンってなっている」「だから、落ちないんだ」と、実際に蔓を引っ張り、その巻の強さを実感する中で、ゴーヤの蔓が生長に重要な役割をしていることに気付いていた。
- Kさんは、いつものように朝、「ゴーヤ、大きくなってきたね」「赤ちゃんのゴーヤないねえ」「ビヨンビヨンが、いっぱいだね」などと話しながら、アサガオの蔓に目を留めた。「あれ、アサガオにはビヨンビヨンないね。アサガオはクルクルなつて上に行っている」と、アサガオとゴーヤの“蔓”や“巻き”の違いを発見した。



実のなる花とならない花があるよ 7月下旬

- 登園時に毎日見続けてきたKさんは、ゴーヤには雄花と雌花があることに気付いた。
- 「いっぱい花が咲いたのにどうして実にならないの?」「あれっ!ゴーヤの赤ちゃんが付いているのがあるよ」「これは、赤ちゃんが付いていない。これも付いていない。赤ちゃんが付いていないのがいっぱい」(雌花は咲く前から実となる場所に小さな膨らみがあることに気づき、「ゴーヤの赤ちゃん」と表現した)。
- Kさんは、「これが、ゴーヤになっていくんだよ」と、母親にも自慢げに話した。
- ある日、「先生、発見。赤ちゃんができていた花の色が違う」と、目を輝かせている。
- 保育者が、「どういうことなの?」と聞くと、「ゴーヤの赤ちゃんができていた花の中は緑だけど、できない花は黄色だよ。ほら」と一つ一つ取って、見付けたことを話してきた。
- 保育者は、その気づきに驚き、認める。



ゴーヤが黄色くなった 8月下旬

- 収穫を楽しんだ後、Kさんが、採り忘れていたゴーヤが黄色になっていることに気付いた。Kさんは、「どうして黄色になったの?」と、触ってみて「あっ!柔らかい」と、緑色の食べ頃のゴーヤとの違いを感じ取っていた。
- 「黄色になったから、苦くないんじゃないの? 緑のは苦いのを取らないといけないから」と、父親がゴーヤ料理をしてくれたことを思い出して、自分なりに考えたように思う。
- 黄色のゴーヤの中を見たKさんは、「中が赤くなっている」と、驚きの声を上げた。職員が赤い実を取って食べて見せた。Kさんも口にしたところ、「甘くておいしい!」と、緑のゴーヤとの味の違いを実感した。



【考察】 Kさんが、雌と雄の花の色や実の付き方の違いに気づき、ゴーヤとアサガオの蔓の違いを発見したのは、登園時に見られる場所に設置したことで、親近感をもてたことが大きいと思われる。また、対象のもつ特徴や不思議さを見付ける楽しさを味わい続けたことで、ゴーヤと向き合うようになり、ゴーヤのことを分かろうとして関わる、という主体性が育まれたように思われる。共に観る保育者の共感的な声かけが、Kさんのゴーヤへの関心を高めたと思われる。